

米国留学前ソーシャルスキル学習セッション受講生の の留学生活：対人行動と対人関係を中心に

著者名(日)	?? 愛, 田中 共子
雑誌名	異文化コミュニケーション研究
巻	24
ページ	41-63
発行年	2012-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000769/

〈実践報告〉

米国留学前ソーシャルスキル学習セッション
受講生の留学生活

——対人行動と対人関係を中心に——

高濱 愛・田中 共子

Lifestyle of Japanese Students in the U.S.
Who Had Taken the American Social
Skills Learning Session before
Their Stay in the U.S.:
Focusing on Interpersonal Behavior
and Relationships

TAKAHAMA Ai and TANAKA Tomoko

The authors of this paper have been providing Japanese students with American social skills learning sessions as part of their pre-study-abroad training. This paper analyzes how the students used their social skills while in the U.S. and how their cross-cultural adaptation transpired by examining a case study. Four female students from the pre-departure session participated in a questionnaire survey and interview process in the U.S. conducted by the first author of the paper. The results show that all the students began to network with people around them during the first stage of their study abroad. Moreover, they also made use of the skills they had learned while studying in the U.S. This implies that the skill learning session worked as an opportunity to understand the American rules for human relationships and provided the students with a way to network with people in the U.S.

キーワード： 米国留学、ソーシャルスキル、留学生、ソーシャルサポート

【序】

“One cannot not communicate”というコミュニケーションの公理(Watzlawick, Beavin, & Jackson, 1967)に従えば、人が暮らしていく際にコミュニケーションは不可避であり、全ての行動がコミュニケーションにつながっている。コミュニケーション能力は、我々が成長する中で身に付いていく(西田・グディカンスト, 2002)。しかし文化に固有なコミュニケーション行動があることから、異文化においては、自分の行動が予期しない意味を持って周囲の人に解釈されたり、思わぬ誤解を招いてしまったりもする。ミスコミュニケーションが継続したり蓄積したりすれば、異文化における対人関係に支障をきたし、不適応を促すことすらある。海外における日本人の不適応を調査した稲村(1980)は、不適応の治療と対策として、渡航前のトレーニングを挙げた。渡航前に対人関係の持ち方について、葛藤場面を想定して適切な対応の訓練を行うこと、特に行動療法的に行うことを推奨している。

留学生の送り出しに伴う教育的試みの一環として我々は、異文化不適応の予防と適応の促進を図る目的で、認知行動療法の考え方を背景とする、渡航前教育プログラムの開発を進めてきた。自分の行動が異文化でどのように受け取られるのかを理解し、現地で受け入れられている行動様式を異文化移行前に知っておく、渡航前教育プログラムである。まず日本からの留学生が最多であるアメリカのソーシャルスキルに焦点を当て、学生がアメリカで遭遇しそうな場面を複数設定し、英語でロールプレイをしてビデオ録画を振り返るというユニットを、2回繰り返して対応の練習をした。徳井・榎本(2006)は、対人コミュニケーション能力の育成のためには、自分自身のコミュニケーションを意識すること、つまり舞台上で演技する自分をもう一人の自分が客席から見るという視点が必要だと主張している。他者からのフィードバックも加えてさらに気づきが進み、コミュニケーション行動を意識的に組み立てていける。

我々は米国留学を予定している日本人大学生を対象に、渡航前のアメリカン・ソーシャルスキルの学習セッションを実施した。アメリカン・ソー

シャルスキルとは、「アメリカの文化や社会で期待されるような人付き合いの要領」を指している(2011a, 124頁)。我々は、アメリカ留学中の対人接触場面で直面する場面を田中(1994)に基づいて想定し、そこで使うスキルを具体的に説明して練習する学習セッションを、渡米前の留学予定者に提供した。そして留学の前中後の3時点を順次みていく縦断的パラダイムを用いて、留学前はセッションへの反応、留学中と帰国後はスキル行使を調べた。この手続きは、対象者を変えて3回試行された(高濱・田中, 2011b)。第1期調査はX大学の短期交換留学生、第2期調査はY大学の短期交換留学生、第3期調査はY大学の語学研修生が参加した(高濱・田中, 2011d)。

海外留学経験者を対象とした我々の先の研究(Takahama, Nishimura, & Tanaka, 2008)では、留学先の社会・文化に適したソーシャルスキルの使用が、留学先での人的ネットワーク(ソーシャル・ネットワーク)の拡大につながり、さらにそのネットワークがソーシャルサポートの獲得に結び付くことが示唆されている。ソーシャルサポートとは、個人が構築した対人関係網であるソーシャルネットワークから得ることが期待される、有形無形の支援を指す(高濱・西村・田中, 2009)。ソーシャルサポートは、情緒的、所屬的、情動的、評価的、道具的サポートなど多様な形態が想定される(和田, 1992, 386頁)。例えば、留学生に履修登録の手続きを説明してくれるのは情動的サポート、試験の点が悪い時に励ましてくれるのは情緒的サポート、辞書を忘れたときに貸してくれるのは道具的サポートである。留学先でのネットワーク形成とそこからのサポートの入手は、異文化環境下における適応を促すことが期待される(高濱ら, 2009)。例えば、在日中国人留学生を対象とした先行研究(周・深田, 2002)では、サポートが適応を促進することが示唆されている。しかし、これらは在日留学生を対象としたものであり、在外日本人を対象とした研究は未だ希薄である。

今回は第2期セッションに参加した、4人の日本人留学生を取り上げる。渡航前の日本ではセッション前と後、留学先では留学後期、帰国後の日本では3か月および9か月経過時に調査が行われた。セッション時の様子は高濱・田中(2010; 2011a)に報告があるが、彼女たちはアメリカで有用な対人行動に関する認知と行動を学んでいたことが確認されている。第三者

のアメリカ人に評定してもらったところ、参加者のパフォーマンスの向上を示唆する結果が得られている(田中・高濱, 2011)。それは録画された演技を見て、マクロ面(全体的な印象)とミクロ面(個々の行動)を10件法で評定し、コメントを付す方法で行われた。今回は、留学先の調査から、学んだスキルが留学の現実場面の中でどのように般化していき、対人的な適応が進んでいったかを分析する。

【方法】

1. セッション参加者

高濱・田中(2010)で報告されている、留学前アメリカン・ソーシャルスキル学習セッション(以下、セッションと称する)に参加した日本人女子大学生4名(S11、S12、S13、S14)。セッション受講の約1か月後に、アメリカの同じ大学に9か月間の短期交換留学に出発した。日本のX大学からアメリカへの留学予定者4名に声をかけたところ、全員がセッション参加を希望した。参加時の年齢はS11とS13が3年生で21歳、S12は4年生で22歳、S14は1年生で19歳。語学試験のスコアはS11がTOEFL(iBT)69、S12とS14がTOEFL(iBT)70、S13がTOEFL(PBT)530であり、留学先の求める水準を満たしていた。申込時に留学目的を記してもらったところ、英語を身につける(S11)、教師を目指すための英語力の向上・英語圏での会話力の向上(S12)、いろいろな人と会おう(S13)、英語を磨きつつ国際関係について学ぶ(S14)こととしていた。セッションでは、9個のスキル(表1)を学習した。S13のみ、欠席が1回(スキル7)あった。

表1 セッションで学習した9スキル: 課題場面・ポイント・解説

【スキル1 表情(笑顔)、アイコンタクト、聞く態度】	
1. 課題場面	あなたは大学のオリエンテーションに参加し、他の学生の前で1分ほどの短い自己紹介をすることになりました。まず他の人が順番に自己紹介していきますので、それをよく聞きましょう。そして、自分の番が来たら自己紹介をしましょう。(pp. 200-201)

米国留学前ソーシャルスキル学習セッション受講生の留学生活

2. ポイント	他人の話をよく聞きましょう。聞いている時は、笑顔とアイコンタクトを忘れずに。
3. 解説	これから学んでいくアサーションのスキルを実践する前には、まず他人の話をよく聞くことが大事です。その際、笑顔とアイコンタクトを忘れずに実践してください。笑顔で聞いていると、話し手に「ウェルカム」の印象をあたえることができます。さらに、日本ではあまりアイコンタクトをとることはしませんが、アメリカではこれも会話の第一段階として重要なことですから、目を合わせて、スマイルを心がけるようにしましょう。(p. 95, p. 106)
【スキル 2 初対面の相手に挨拶する】	
1. 課題場面	いよいよ宿泊先である寮に到着しました。あなたは、大学の寮の 2 人部屋に住むことになりました。部屋に行ってみると、ルームメイトがいました。彼(女)に初対面の挨拶をし、自分は英語があまりうまくないと思っていることを伝えるにはどうしたらいいでしょうか。(pp. 66-67)
2. ポイント	言葉のハンディを補うために、自分の英語があまりうまくないことを明確に伝えましょう。
3. 解説	留学先に到着したばかりの頃は、もちろん語学力にあまり自信が持てないことも多いでしょう。そんな時は、自分が (1) 外国人であること(英語はノンネイティブであること) (2) しかし理解できるように努力していることを、明確に言葉で伝えましょう。アメリカには多くの移民がいるので、英語がうまくない人がいて当たり前だとされています。ですから、英語に自信がないことにあまり引け目を感じることはありません。むしろ、あなたが英語力に自信の無いことを伝えるほうが、アメリカ人は喜んで聞いてくれるはずです。
【スキル 3 友人を作る】	
1. 課題場面	あなたは、いつも同じ授業を受けている(アメリカ人の)学生と友達になりたいと思っています。今日もクラスに行くとその学生さんを見つけました。自分から積極的に話しかけるにはどうしたらよいでしょうか。(pp. 112-115)
2. ポイント	友達作りのためには、気軽に声をかけてみましょう。まず、はじめの話題として、自分のことから先に話すこと(自己開示)が大切。

3. 解説	<p>友達になりたいと思う相手に出会ったら、まず声をかけることから始めましょう。何か自分に関することから話してみましよう。この時、スキル①で学んだ表情(笑顔)、アイコンタクトを忘れずに行いましょう。</p> <p>さらに、日本人には話のはじめに、相手に質問ばかりしてしまうという傾向があります。これはアメリカ人からは、「尋問」されているようだという印象をもたれてしまうかもしれません。アメリカではまず、自分の情報を提供すること(自己紹介、自分の専門の紹介、同じ授業をとっていること、この間カフェテリアで見たこと)などからはじめましょう。</p>
【スキル4 先生に質問する】	
1. 課題場面	<p>留学して初めての学期に、あなたは自分の専門である言語学のクラスをとることにしました。以前日本で言語学概論(入門)の講義を履修し、言語学は得意だったので、言語学上級のクラスを選びました。授業を受けてみると、言語学専攻の現地の学生ばかりが参加していて、専門用語がたくさん使われていて、進むのが自分には早すぎるように感じられました。しかし、せっかくアメリカに来たのだから、この講義を履修し続けて、是非単位を取得したいと思っています。そこで、担当の先生にアポイントメントを取り、今後どうするかについて相談することにしました。何とかしたいという気持ちを先生に伝えるには、どうすればいいでしょうか。(pp. 228-229)</p>
2. ポイント	<p>先生に相談することは、学生の権利。攻めの学習態度を持って、積極的に自分の意欲を示して開拓して行きましょう。</p>
3. 解説	<p>アメリカの大学で学生として成功するためには、まず攻めの学習態度を持つことが大切です。例えば、アメリカでは、学生が先生に相談することは権利として認識されています。ですから、心配なことがあった時は、すすんで先生とアポイントメントをとって相談しに行きましょう。黙っているのは、あなたが問題をかかえていることが先生には伝わりません。問題点を自分から伝えることで、先生も対応してくれることが期待できます。</p>
【スキル5 授業で意見を言う】	
1. 課題場面	<p>教育学の授業中に、日本の学校における英語教育が話題になりました。どうやら日本の学校では、どのように英語を勉強しているのか、先生もクラスメイトも興味を持っているようです。日本の</p>

	英語教育全般について英語で話すのは難しいですが、これまでの自分の経験からなら少しは話すことができそうです。次の先生の台詞に続けて、簡単に言えることを説明してみましょう。(pp. 230-231) Prof. White: Could you tell us a little bit about English education in Japan? You graduated from Japanese schools, so you can tell us about how it is.
2. ポイント	授業中に発言することは、アメリカの大学で成功するために最も重要なことの1つ。自分の意見は必ず言いましょう。
3. 解説	先生から指された場合だけでなく、自分からも積極的にアピールして発言していきましょう。話の全体像がつかめていなくても大丈夫。経験に基づいた自分の意見を述べることも大切です。他のクラスメイトに遠慮をする必要はありません。
【スキル6 先生に要求を伝える】	
1. 課題場面	学期末のテストが始まり、経済学のクラスで in class exam を受けることになりました。これは、教室で学生が一斉に行う形式の試験です。持ち帰って行うレポート形式の take home exam ならまだしも、この形式の試験となると心配です。留学してまだ数ヶ月なのに、初めて見る文章を辞書なしで読み、他のアメリカ人の学生と同じ時間内に解答できるのか。たとえ答えが分かったとしても、ボキャブラリーに不安があるだけに、ちゃんと英語の文章にできるのか。そこであなたは、担当の先生に事情を説明して、試験時間中に電子辞書の持込を許可してくれるように頼んでみるのはどうかと考えました。運良く、授業の後で先生をつかまえることができましたのですが、さて、どうやってあなたの希望を伝えればよいのでしょうか？ (pp. 232-233)
2. ポイント	問題を感じたら、率直に先生に言いに行きましょう。
3. 解説	授業が始まったら、先生と話す必要が早速出てくる重要な話題として、テストと宿題のことがあげられます。テストや宿題に関して、特別な配慮を必要としているなら、先生にそれを伝えに行きましょう。なぜこのような要求をするのか、自分の状況と要求の理由をきちんと説明して、率直に相談するという姿勢を持ちましょう。そのような要求は失礼でも無神経でもありません。ハンディに見合った、むしろフェアな扱いを要求している、とみることもできるからです。先生の関心は、学生の意欲にあります。ハンディがあっても意欲的に学ぶ姿勢がある学生を、先生が応援し

	てくれることも少なくありません。黙って諦めてしまうより、先生に言いに行ってみましょう。
【スキル7 交渉する】	
1. 課題場面	大学の文房具店で、2日前にボールペンを買いましたが、使ってみるとインクが出てきません。お金を返してもらうか、新しいボールペンに交換してもらいたいと思っています。お店の人に対して、どのように交渉すればよいでしょうか？(pp. 84-85)
2. ポイント	アメリカ人はよく主張して盛んに交渉します。
3. 解説	日本よりももっとアサーションを自然で当然なこと、不可欠なことと考えているアメリカ人の態度は、時に日本人にとっては遠慮がなさすぎると感じられるかもしれません。しかしアメリカ社会のルールとしては、しっかり主張しきちんと交渉をすることは、物事を決めていくための当然の営みであると受け止められています。自分の提案を相手がどう感じるか過度に気にかけたり、結果がうまくいかどうかを気にするあまり、主張の機会を逸してしまったりするのは考え物です。チャレンジ精神を持って、積極的に交渉してみることが大切です。交渉の際には、できるだけ[1]状況をきちんと説明し、[2]要望や提案の理由を明確に挙げながら、[3]交換条件があれば示すようにすると、うまく行きやすいでしょう。
【スキル8 依頼を断る】	
1. 課題場面	あなたは、アメリカ人の友人から、彼(女)の家で行う今週末のパーティに、日本食を作って持ってきてくれないかと頼まれました。しかし残念なことに、あなたの寮にはキッチンが無いため料理は作れず、友人の依頼を引き受けることはできません。だから依頼は断らざるをえませんが、でも日本からレシピを持ってきているので、もし彼(女)の家でキッチンを借りて作るということならば、料理を提供できるかもしれません。その友人に、このような事情を説明してみましょう。(pp. 86-87)
2. ポイント	相手から依頼されてノーというときは、理由や代替案を明確に伝えるようにしましょう。
3. 解説	何か頼まれたとき、ノーという返事が必要になるときもあるでしょう。自分がなぜノーと言っているのかを、相手に理解し納得してもらうには、理由や代替案を明確に伝えることが役に立ちます。

【スキル 9 自己開示する】	
1. 課題場面	あなたは、友人から“How was your weekend?”と質問されました。これに答えるため、週末に経験した出来事について、友人に話してみましょう。
2. ポイント	具体的なエピソードやコメントを交えながら、自分の人間味や個性につながる話をしましょう。
3. 解説	あなた個人の情報や感想を他人に伝えることを、「自己開示 (self disclosure)」といいます。あなたが自己開示をすることに合わせて、あなたの周りの人もまた、自己開示をすることが知られています。留学中にあなた自身のことを積極的に人に話すことは、相手との距離感を縮めたり関係を深めたりするのに役立つでしょう。なお出来事を話す際には、具体的な描写、数字を挙げた説明など、リアルにイメージしやすい語り方が喜ばれます。金曜日に「良い週末を」と挨拶しあって別れ、次週に様子を尋ねあうことは、よくあります。
【スキル 10 ジョークを言う】	
1. 課題場面	あなたは、インフォーマルなパーティで3分ほどの自己紹介のスピーチをすることになりました。自分のことを印象付けるために、ジョークやユーモアを交えて聞き手の笑いを誘うような、簡単なスピーチをしてみましょう。
2. ポイント	ジョークを言うことは、アメリカでは大事なスキルの一つと考えられています。
3. 解説	ジョークを交えることで、聞き手の心をつかんだり、話を魅力的なものにしたりできます。逆に形式的で真面目な話は、アメリカ人の聞き手の期待を満たしていないと考えられます。初対面の場合や自己紹介のスピーチなどでは、打ち解けた雰囲気を作るためにも、ジョークを取り入れることは大切なことです。楽しく生き生きと話せる人は、知性やセンスが高く評価され、魅力的に映ります。あなたのジョークが必ずしも聞き手にうけなくても心配いりません。楽しい話題を相手に提供しようとする姿勢自体に、聞いているアメリカ人は好感を持ってくれるはずです。臆せずどんどんジョークを試してみましょう。(pp. 190-193)

注1) 表中のページ数は、田中(1994)における参照ページ数を示す。

注2) スキル2については、参加者のレベルを勘案して学習を省略した。

注3) スキルは番号が大きくなるにつれて難易度が上がり、おおよそスキル1から3までが初級、スキル4と5が中級、スキル6から10までが上級スキルに該当する。

2. 手続き

参加者4名のアメリカ渡航後8ヶ月時点で、第一著者が留学先を訪ね、面接法と質問紙法を併用した調査を実施した。留学期間は全9ヶ月で、調査時は留学後期にあたる。以下では質的な情報から、事例的検討を試みた部分を報告する。

2.1 質問紙調査

研究シリーズで一貫して用いている留學生活に関する質問紙(高濱・田中、2009)を渡し、スキル使用の有無と状況(表2)を記してもらった。

表2 スキル使用に関する質問項目

留學準備のための学習セッションでは、以下の9つのソーシャルスキルを取り上げました。あなたは留學中にこれらのスキルを使用しましたか? セッションに出席した回のスキルは「習った」、欠席した回のスキルは「習っていない」に○をしてから、お答えください。

(1) 自己紹介(笑顔、アイコンタクト、聞く態度)のスキルを(習った・習っていない)

① 使った→いつ/誰に/どこで/スキルのどの部分を/その結果・効果/その時のあなたの気持ち

② 使わなかった→その理由(自由記述)

注1) スキル2からスキル10についても、同様に尋ねた。

2.2 面接調査

詳しい語りを得るため、質問項目への回答をみながら1時間ほどの半構造化面接を行った。対話の焦点は、セッションで学習したスキルの使用状況や使用のエピソードと、留學中の対人関係である。どのように行動して人との関係を作り、付き合ってきたかを語ってもらった。加えて留學生活を総括してどうとらえているかを、振り返ってもらった。対話は第一著者

と一対一で行われ、学生の了解を得て録音された。

【結果と考察】

1. スキルの使用状況

スキルの使用状況に関する集計結果を、表3に示す。S11は質問紙ではスキル3「友人を作る」を不使用と答え、S11はスキル9「自己開示する」、S13はスキル9とスキル10「ジョークを言う」の回答欄を空欄としたが、面接では使用の語りがみられたため、使用ありとみなした。スキル1から7とスキル9は、S13が欠席のため未習のスキル7を不使用であった以外は、他は全て使用が確認された。

上級レベルとみられるスキル6以降では、不使用がスキル8「依頼を断る」に3名、スキル10「ジョークを言う」に1名みられた。その理由には、「特に依頼されなかったような…(S11)」「断る理由がなかったから(S12)」「特に断ることもなかったため(S14)」と記していた。般化しうる場面への遭遇がなかったのは、留学期間が短く、社会的場面に広がりか乏しかったことが考えられる。スキル8は、学位取得を目的とする長期留学者に、より適した場面かもしれない。スキル10では、S12が不使用の理由として「ジョークを言うことにちゅうちょした」と記していた。

表3 留学中における参加者のソーシャルスキルの使用

参加者	スキル								
	1 非言語的表現	3 友人作り	4 先生に質問	5 授業で意見	6 先生に要求	7 交渉	8 依頼拒否	9 自己開示	10 ジョーク
S11	○	○*	○	○	○	○	×	○**	○
S12	○	○	○	○	○	○	×	○	×
S13	○	○	○	○	○	欠席	○	○**	○**
S14	○	○	○	○	○	○	×	○	○

注1) 使用者: ○、不使用者: ×

- 注2) 質問紙では不使用と回答していたが面接調査では使用が確認されたもの:
○*
質問紙では空欄であったが面接調査では使用が確認されたもの: ○**

2. 留學生活の様子と評価

2.1 語りの要約

表4から表7に、語りの要約を整理して語りの流れに沿って示した。対人関係に関する語りには、ネットワークとスキルの語りを明確に区分しづらい部分があった。

表4 S11の語りの要約

① 現在はアメリカ人と同室の寮に住んでいる。／② 留學生活はまもなく終わるが、一言で言うとうれしかった。日本では味わえない楽しみに満ちており、多様な人との出会いが刺激的で楽しい。／③ 日本人の留学仲間とは愚痴を言い合ったり困難を共有したりした。日本人の先輩には、いろいろなことを教えてもらい、アメリカ人を紹介してもらったりした。日本語関係のボランティアを自分から問い合わせて始めたが、それが縁でアメリカ人や他の外国人にも友人が広がった。日本に興味のある人とは、友達になりやすい。他国で仲良くなった人が、仲間や家族の集まりに入れてくれることもある。アメリカ人のルームメイトには、英語の発音などを教えてもらった。／④ 習ったスキルのことは、関連する出来事があったときに思い出した。笑顔で色々なことを乗り切った。交渉や主張は、最初の頃から使った。後から、こうすればよかったかな、と思いつくこともある。友達作りは難しい。最初はイベントで知り合うことが多かった。／⑤ 総じて広く浅くの付き合いで、深くなりにくいことは辛かった。積極的に行くことが大事だと思う。積極的な気持ちがあれば動いてくれる。何回も試みることは大事だと思う。

- 注1) ①: 住居関連、②: 「一言で表現」した留學生活と留學生活の感想、③: 留学先での対人関係(ネットワーク)、④: 学習したスキルの使用状況

表5 S12の語りの要約

① 現在はネイティブ用の寮に住んでいる。／② 留學生活は一言で言うとうれしかった。期間を延長したい。最初は言葉が通じなくてネイティブと話すのは

怖かったし、授業には困難もあった。でもいろいろな国の人に会えて楽しい。／
 ③ 皆友達を作りたがっており、留学生の友人はすぐできる。これからも、いろいろな国の人と仲良くなりたい。留学のコツは友達作りだ。自分の友人関係は充実していた。／④ 習ったスキルはすごく使えた。特に留学初期の頃役立った。先生と交渉したり、仲良くなったりできた。無駄話も大事だと思う。自分からアプローチしたらその分プラスになるけれど、しなかったらゼロだ。ネイティブは、留学生で分からないから教えてというと、よく助けてくれて優しいし、そこから話せる関係になる。ジョークは結構笑ってもらえた。／③ 留学期間の長い日本人には相当助けてもらった。ネイティブのスピーキングパートナーも紹介してもらった。日本人の留学仲間とは愚痴を言って支え合った。他国人の留学生とは、買い物など実用面で助けを借りながら仲良くなり、相手の国の言葉も勉強している。アメリカ人学生は授業後にさっと帰り、広く浅く付き合う人が多いようだ。でもよく一緒にいる人も、たまに話す人も必要だ。

注1) ①: 住居関連、②: 「一言で表現」した留学生活と留学生活の感想、③: 留学先での対人関係(ネットワーク)、④: 学習したスキルの使用状況

表6 S13の語りの要約

① 他国人の学生とルームシェアするアパートに住んでいる。／③ 他国人で何でも話せる友人が複数できた。友達がいなかったら生きていけなかったと思うほど、人に助けられた。留学で得たものは人とのつながり。／② 留学生活は毎日がハプニングで、楽しい。／④ スキル学習をしておくことは、事前に免疫を得ておくようなものだ。オープンにする態度とか、先生には頼みごとをしてもらって、言葉ではない部分の学習が役に立った。先生との交渉方法は実際に使えたし、いろんな頼みごと、言ってみたら案外大丈夫だと分かった。ルームメイトに言いたい事がある時に、上手く不満を言う方法も教わりたい。／
 ③ 学外で会った、日本に興味のあるネイティブのスピーキングパートナーとは、日本語と英語を交換教授している。日本の留学仲間とはよく話を聞いてくれて、助けてくれる。／④ 友達作りは、年齢とか国籍とか関係なく、とにかく話してみる。自己紹介をして、留学生だから分からないことがあると話しかけ、目立つことをして自分を印象づける。／③ 自分は狭く深くより、いろいろと広く付き合う方だと思う。アメリカにいても自分はあまり変わらず、特に違和感はなかった。

注1) ①: 住居関連、②: 「一言で表現」した留学生活と留学生活の感想、③: 留学先での対人関係(ネットワーク)、④: 学習したスキルの使用状況

表7 S14の語りの要約

① ネイティブのための寮に、ネイティブのルームメイトと住んでいる。／
 ② 留学は発見が多く、楽しかった。留学は、いろんな国の人に出会えた貴重な機会だ。日本の良さも分かり、好きになったしもっと知りたい。人間どこでも同じで、みな一生懸命生きていると分かった。言葉が分からなくて、ディスカッションの授業では辛いこともあった。／③ 他の外国人のいい友人ができて、外国語を教えてもらったりした。元気づけてくれる、ネイティブの友人もいる。ただし寮生の回転は早いのですぐいなくなり、途中から友達作りが面倒になった。でも留学のこつは人と関わること。引きこもると寂しいし、一人で時間をもてあますと余計なことを考えてしまう。今はボランティアをしているけれど、もっと早くから始めれば良かったと思う。／④ スキル学習は、先生との話し方や交渉がとて役立った。先生に相談に行くとき意欲をアピールすることができる。自分のことをよく話すというのも、大事だと納得できた。授業の雰囲気によって友達作りは難しいが、その週にやったことを聞きあえる程度の友達はできた。主張することは、相当がんばった。／③ 日本人留学生からは、勉強や語学でいい刺激を受けたし、家族みたいに癒し合いながら助け合った。自分は広く浅くより、狭く深く付き合うタイプだと思う。

注1) ①: 住居関連、②: 「一言で表現」した留學生活と留學生生活の感想、③: 留學先での対人関係(ネットワーク)、④: 学習したスキルの使用状況

2.2 対人関係に関する注目すべき語り

(1) 留學中の住環境とサポート

興味深い語りが得られた部分を、以下に細かく見ていく。住まいは、S13がキャンパス付近のアパートだった以外は、3名がネイティブの学生が住む寮に、アメリカ人のルームメイトと住んでいた。S13は留學当初は別の部屋に住んでいたが、渡米後約2か月が経過した頃、ルームメイトの突然の帰国により別の住まいが必要になり、動揺しながらも、ネットワーク資源を活用して必死に探したという(表8)。

表8 S13における住居探しの語り

〈S13〉 だから空いてる部屋(中略)とか探したんですけどなかなか見つからなくて、そんな時は、もう電話のメモリーにある留學生の友達全員に電話して、そしたらなんかすっごく助けてくれたんですね。中国人の友達とか韓国人の友達

とか、(中略)すごい友達のネットワークが広がって、(中略)最終的にギリギリぐらいのところになって、すごい、友達の友達の友達ぐらいの部屋が空いて、もしかしたら住めるかもしれないっていう情報が回ってきて、(中略)それが今の部屋なんです。

S13 は自らの留学を振り返って、「一番困ったのは、家がなくなったとき」と語っていた。人的資源からの支援を受けて、難局をしのいだことが読み取れる。

(2) 留学生活の評価

留学生活は全員が楽しいと表現し、肯定的に受け止めていた。楽しめた理由(表9)に、人との出会い(S11、S12)、人とのつながり(S13)、人と出会えた貴重な機会(S14)を挙げ、現地での人との出会いとかかわりに帰属していた。

表9 S11、S12、S13、S14における楽しさの理由の認知

〈S11〉(留学中は)もう人との出会いがすべて楽しかったですね。(中略)やっぱり日本では味わえない楽しみ。(中略)ここだったら出会う人がみんな違うバックグラウンドがあって、だから、すごい誰と会っても刺激的だったなと思いますね。

〈S12〉(留学に来て)楽しかったっていうのは、ほんとに、日本と違って、いろんな、特徴を持った人に会えるから。(中略)すごいバラエティ豊かな感じで、いろんな国の人に会えるから、すごい楽しくて。(中略)みんなやっぱり友達を作りたいっていう気持ちはすごい強くて、だからなんか、もう話しても楽しくて。

〈S13〉(留学生活は)楽しいですね。(中略)コミュニケーションが必要なのが多いのが、大変だけど楽しいとこです。

〈S14〉(留学生活は)楽しかったですけど、(現地では出会う人と)よく話してみたらやっぱり底の部分は人間一緒だなあってのがすごいあって。頑張れば、誰でも、こう仲良くなれるというか、なんか無いんだな、垣根は無いんだなって思いました。

注1) 括弧内は筆者による補足

(3) 留学先のネットワーク

ホストであるアメリカ人、日本人、他国からの留学生という、3つのカテゴリーに属するメンバーと交流し、ネットワークを広げるために、セッションで学んだ心構えを、留学の初期から生かそうと努めていた(表10)。S11は笑顔という非言語的スキルを使いながら、困難を克服したという。S12とS13は、友人作りには、自分から積極的に接近・アプローチすることが「プラスになる」と述べている。S14は、留学前セッションで学んだことを、留学先で実際に使うことによって、人の輪が広がるようにするとよいと勧めている。

表10 S11、S12、S13における対人的アプローチ

<p><u>笑顔のスキル</u></p> <p>〈S11〉(留学中に困難に直面した際には)笑顔があればなんでも乗り切れます! っていう感じですね。(中略)わからないときは笑顔で乗り切りましたねー、なんでも。あはははは、みたいな。(中略)もう笑顔は大切ですね。</p> <p><u>接近・アプローチのスキル</u></p> <p>〈S12〉やっぱり、すごいこっちに来て感じたのが、自分からアプローチしたら、アプローチした分だけプラスになるけど、しなかったらもうゼロだなあって。(中略)無駄話が大事だなあって思って。(中略)ネイティブスピーカーの人と友達になるのは、「ちょっとわからないから教えて」って言って、そこから友達になるっていうことが多くて。(中略)なんかこっちの人って結構あったかくて、なんか、「留学生でわかんないんだけど」って言ったら、「えっ? どっから来たの?」とか「どんぐらいいの?」とか言って。で、やっぱり(アメリカに来て)3か月とかだったら、「えっ、まだ3か月なの?」って、すごいそれで助けてくれるし、話せるようになる。</p> <p>〈S13〉友達がいて、助けられたことがすごい多いですね。もう友達がいなかったら生きていけない…っていうくらいまで思いましたね。年齢とか国籍とか関係なく、とりあえず、とにかく話して。仲良くなってみるのが大事だと思います。(中略)(友達を作るために)とりあえず、自己紹介をしましたね。(中略)授業にいったら、絶対一番前の真ん中に座るんですよ。で、そこから、「私 exchange だから、よくわからないんだよね」とか、ちょっとそういう感じで話しかけて行って、周りに友達を作って。で、もうそのグループでグループプロジェクトをしたり。</p> <p>〈S14〉(留学を楽しむコツについて)ボランティアとか、日本語パートナーと</p>
--

か、そういうのに参加したら、たぶんどんどん(人の)輪も広がると思うし、人とどんどん接していったらいいと思う。その先生の最初の授業(注: 留学前セッションを指す)じゃないですけど、ああいうの使って、ああいうのもきかけとなって、なんかどんどん輪を広げていったらもっと楽しくなるんじゃないかなって。

注1) 括弧内は筆者による補足

(4) セッションで学習したスキルの行使

使用したスキルの評価は、とりわけ先生との交渉スキルで高い。全員が使用し、一定の成果を得て満足している。S12は、授業内容を教えてもらえただけでなく、先生の家族との交流を持つに至った(表11)。S13は、スキル6「先生に要求を伝える」での学習を、就職活動のため先生に授業欠席の許可を取る際に応用した。S14は、辞書の使用を先生に交渉してみた結果、許可されはしなかったものの、自分の意欲と日頃の努力を先生に認めてもらうことができた、その効果を表現している。

表11 S12、S13、S14における先生との交渉スキルの使用後の反応

先生に交渉するスキル

(S12) 実際に、先生に対する交渉は使えましたし、(中略)なんか無駄に先生に話しかけにいたりとかしました。(中略)逆に先生と仲良くなっちゃって。(中略)その先生、えっと一番はじめのクォーター(注1)で、〇月から始まったやつなんですけど。〇〇(授業名)っていう授業で、(中略)授業内での議論が多くて、で、やっぱり、先生が話すのもその時はよく感じて、まあ聞き取れなかったんで、その授業終わった後に、先生に「私は、あの、exchangeで来たんですけど、ちょっとこらへん聞き取れなかったんで、教えていただけませんか?」って聞いて。そしたらまあ丁寧に教えてくださって、そのあと、「君は日本から来たのかい?」って聞かれて、「はい、日本から来ました」って言ったら、たまたまその先生もやっぱり日本に興味を持ってくださってる先生だったみたいで、(中略)奥さんと子供と遊んでみたり。

(S13) テストのときに、あの「辞書持ってっていいですか(注2)」とか、そういう先生に頼むときの、話し方が一番役に立ったと思います。(中略)結構授業終わって質問に行くんですけど、そういうとき、なんかどれぐらい英語を書いたらいいのかとか、あと今学期就活してたんなんですけど、(中略)就職活動とかの休みをとらなくちゃいけない。そのときの依頼の仕方とか、そういうとき

に(先生に伝えてみたら、先生が)もう、「はい、頑張るって行って来い」みたいな感じで。送り出してくれて。あっ、言ってみたら結構大丈夫なんだあって。〈S14〉 けどやっぱり最初のクォーターのときは、教授に相談に行ったりとか。してたんですよ。あの、自分の専門外とってたんで、全くわかんなくて。で、それで授業のあとに話聞いたりとか、あと交渉とかはすごく参考になったと思いますね。(中略)(難しいと評判の先生の授業をとった時に)ディスカッションも多くて、宿題も多くて、でいつも先生に終わった後に「今日ここがわからなかったんで説明してください」とか。あと「辞書を使ってもいいか」とか。テストが全部ライティングだったんですよ。エッセイだったんで。(中略)(辞書の使用については)辞書はだめでした。(中略)(ただ、先生に)言ってみたら、頑張るっていう意欲は伝わります。だからちゃんと成績も出してくれたんですよ。(中略)だって毎日、いつもわかんないですとか言って、で、教科書とかもこうめっちゃ書いてる教科書で、先生に聞いているわけじゃないですか。(中略)この子こんなに勉強してたんだー、みたいな(印象を先生に与えることができた)。

注1) 「クォーター」とは、1年を4学期に分けた場合の1学期を指す。

注2) スキル6の課題場面を指す。

注3) 括弧内は筆者による補足

スキル学習の影響と成果については、4名全員に共通して、渡航後1か月から3か月という留学初期の頃に評価が高い。S12は渡航後「3か月」の頃の友人作り(表10)や、「一番はじめのクォーター」の授業(表11)での、スキル活用がみられる。S14も「最初のクォーター」の授業から先生に相談・交渉するスキルを使用している(表11)。S13も、渡米後2か月ほどの時期に住まいを失うという難局をスキルとネットワークを駆使して切り抜けた(表8)。残るS11も、留学初期に、授業の履修の交渉のため大学の事務室を訪れた(表12)。留学初期の適応の促進に、スキル学習を生かせたと認識している。

表12 留学初期の段階におけるS11のスキル使用に関する意気込み

〈S11〉(留学して)最初のへんはやっぱり使ってみようっていうのがあったから、交渉してみようとか、(中略)最初のへんはたぶん(スキルを使用)してたと思います。(中略)(例えば)授業が一、なんか要件満たしてないと取れないみたいなのがあって、だからあの department office とかに行って、交渉しなきゃ

いけないとか、最初にあったりとかしたんで。(中略)(それで一人でそのオフィスに)行きましたねー。

注1) 括弧内は筆者による補足

自分のスキルレベルを振り返って不備を実感したという語りは、S11 から得られている(表13)。留学前にセッションに参加したり、現地で学んだりしてソーシャルスキルを磨いているものの、S11はまだ自分のスキルは不十分であるという。友人のS13を引き合いに出しながら、もっとうまくやりたいと述べている。これは彼女のスキルレベルの自己アセスメントであり、向上に対する意欲の表れともみなせる。

表13 S11における自己のスキルレベルに関する語り

〈S11〉(S13の友達作りのスキルについて)最初にS13は名刺配りますからね。(中略)で、名刺配って、で「電話かけてね」って言ってる横で、あたしそこまできないなあ、って思いながら。(中略)やっぱそういうところで比較してしまうと、自分はまだできなかったかなあと。

注1) 括弧内は筆者による補足

彼女らは、総じて学習したスキルを使おうとしており、留学中に実際に使ってみることによって、一定の効果を得ていた様子が見えてくる。

【総合考察】

本稿では、留学前に提供されたアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションに参加した4名の日本人女子学生を対象とした、アメリカ滞在中の調査をもとに報告を行った。彼女たちが留学前に学んだスキルをどう使い、現地での対人関係をどう築きながら、留学を楽しんでいったかが浮かび上がってきた。

スキル8「授業で意見を言う」は4名中3名が、課題場面との類似場面に出会わなかったため不使用と答えたが、他はほぼ全てのスキルの使用が確認された。1年近くに及ぶ留学生活で、彼女らは友人を作ろうと初期か

ら積極的に努力しており、スキル学習で知った考え方や行動のパターンを適宜取り入れていたことが伺える。留学前ソーシャルスキル学習は、留学初期の社会的場面で特に役立つと認識されていた。セッションによるスキル学習は、アメリカにおける対人関係の規範を知る機会として機能しており、アメリカで人付き合いをする際、何をどうするのかという指針を得ることにつながっていた。教員との関係性構築の手続きは、特にその有用性が高く評価されていた。留学生としてのハンディを持っているが意欲はあると示し、必要な配慮を受けることは、限られた留学期間の学びの質を高める効果的な方策といえよう。

アメリカ人の主張スタイルは直接的である(西田ら、2002)とされ、主張行動の要求水準は、アメリカでは日本よりかなり高いと考えられる。この文化特異的な主張性の高さに対応して、彼女らの主張行動は渡航後にさらに磨かれたと考えられる。笑顔や自己開示、小さなおしゃべりなどが使われていき、対話や関係性の中で、自分の考えを明確に述べるのが、いかに機能するかが確認されていった。文化行動は容易に察知・獲得できるものばかりではない。背景を理解した上で、文脈に応じた行動方針を定め、適した振る舞い方で自分の意図を的確に伝える練習は、異文化圏への渡航に先立って行われることが効果的であろう。彼らにおいては、それが関係性形成の滑り出しを支えて、留学生生活を紡ぎ上げるのを助けていったとみることができる。

ネイティブの友人を持つ場合、日本に興味を持つ人である場合と、同室など何らかの共通点を持つ人である場合がみられた。ネイティブとの深い関係性の構築はいささか難しいとされながらも、アメリカ人も他の外国人も同国人も含んだ、多様な人とふれあう関係性の構築は、本人が能動的な姿勢を持てば開始できると捉えられている。彼女らは広範囲の対人関係の魅力と可能性に気づき、その交流は視野の広がりにも貢献している。ホストとの関係は少しずつ進み、文化的支援を得て社会的適応性を高めた。一方で日本人の留学仲間とは親密な内集団を形成した。同国人とは身内感覚をもって密に助け合い、他国の留学生とは留学生独特の困難やハンディを共有しつつ関係を育んでいき、その情緒的な支援や道具的な支援は、心理的

な適応を支えたと考えられる。

多様なソーシャルサポートを手に入れ、一様に留学を楽しかったと述べる点では、彼女らはいわゆる留学の「エンジョイメントグループ」(Takahama et al., 2008) に属すると考えられる。彼女らが留学の成果として人との出会いを挙げ、留学のこつに友人作りを挙げ、留学の意義を人との出会いに見いだしている点は興味深い。対人関係が、留學生活の重要な部分を占めていることが分かる。

スキル学習セッションを経た日本人留學生は、留学中の友人作りを重要視する傾向があるという(高濱・田中, 2009; Takahama and Tanaka, 2011)。これは米国留学前にスキル学習を経た学生と、経なかった学生を対象に、留学初・中・後期に渡って、スキル使用状況とサポート獲得状況を調べた事例研究から示唆されている。スキル学習による対人技能の向上は、留學生活の充実をもたらす起点となる可能性があるろう。

最後に今後の課題について四点述べる。第一にセッションで扱うスキルの内容と順番について、とりわけスキル8「授業で意見を言う」の学習タイミングを、参加者の留学期間をみながら検討する必要がある。また今回は対人行動に焦点をあてた教育として、あえて英語の正確さにこだわらないとの教示が行われており、英語力の観点からの検討は行っていない。だが英語教育関係者には、語学との関連も興味あるところとして、例えば語学力と課題のこなし方など、新たな検討の角度も見いだせよう。第二に、今回の参加者が4名に限られていることから、さらに参加者数を蓄積していくことである。事例数が増加すれば、数量的な検討の可能性が広がる。第三に、彼女たちの帰国後について、さらに調査と分析を進めることである。留學全体を総括して、スキル使用と対人関係と適応への、体系的な洞察を尋ねたい。第四に、本稿では留學中のソーシャルスキル使用に焦点を当てたが、留學中のソーシャルネットワークとの関わりには未解明な部分が残る。アプローチの開始時期が早く、行動指針を持つがゆえに迷いや失望、誤解、諦めなどの否定的反応が緩和されることは、サポートの獲得時期や総量の面で有利に働いたと考えられる。しかしスキルの人為的学習者が得るサポートが、他と比べて質的にどう異なるかは、さらに詳細な探求

を要する。これまで第1期セッションの参加者については、留学先のソーシャルネットワークを、詳細に点検した報告がある(高濱・田中, 2011c)。現地のネットワークから得られたサポートの種類、質、程度やネットワークメンバーの構成をさらに探れば、サポートを媒介としたスキルの適応促進仮説の検証につながるだろう。

注

- 1) 今回の調査対象者をS11-S14としたのは、一連のアメリカン・ソーシャルスキル学習セッションに参加した学生がS1からS10まで既に存在しており、その参加者の通し番号を継続する便宜のためである。

引用文献

和文文献

- 稲村博(1980)『日本人の海外不適応』日本放送協会。
- 周玉慧・深田博己(2002)「在日中国人留学生に対するソーシャル・サポートに関する研究」『社会心理学研究』第17巻、第3号、150-184頁。
- 高濱愛・西村佳恵・田中共子(2009)「短期日本人留学生のソーシャルサポート・ネットワークの構造に関する定性的研究」『静岡大学国際交流センター紀要』第3号、61-77頁。
- 高濱愛・田中共子(2009)「在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用——留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合——」『留学生交流・指導研究』11、107-117頁。
- 高濱愛・田中共子(2010)「米国留学予定の日本人学生を対象としたソーシャルスキル学習」『一橋大学国際教育センター紀要』創刊号、67-76頁。
- 高濱愛・田中共子(2011a)「米国留学準備を目的とした短期集中型アメリカン・ソーシャルスキル学習セッションの記録(1)——自己紹介と対人関係の開始に焦点を当てて——」『一橋大学国際教育センター紀要』第2号、123-132頁。
- 高濱愛・田中共子(2011b)「派遣留学生の教育的トータルサポートシステム構築へ向けて——日本人留学生を対象とした留学前および帰国後教育プログラムの試み——」『留学交流』2011年7月号。
- 高濱愛・田中共子(2011c)「在米日本人留学生のソーシャル・サポート・ネットワーク(1)——事前セッションによるソーシャル・スキル人為学習者における検討——」『日本応用心理学会第78回大会発表論文集』19頁。
- 高濱愛・田中共子(2011d)「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャル・スキル学習——語学研修生を対象としたセッションの記録」『異文化コミュニケーション研究』第24号、107-117頁。

米国留学前ソーシャルスキル学習セッション受講生の留学生活

ション研究』第 23 号、69-100 頁。

田中共子 (1994) 『通じる前向き会話術——アメリカ留学ソーシャルスキル』アルク。

田中共子・高濱愛 (2011) 「アメリカン・ソーシャルスキル学習における演技の他者評価 (1): 導入的な 5 スキルに対する学習者のパフォーマンスへのネイティブのコメント」『岡山大学文学部紀要』第 55 号、17-30 頁。

徳井厚子・榎本智子 (2006) 『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』ひつじ書房。

西田司・グディカnst、W. B. (2002) 『異文化間コミュニケーション入門』丸善株式会社。

和田実 (1992) 「大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響」『教育心理学研究』40、386-393 頁。

欧文文献

Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008). The influence of social skills on getting social support for adolescents during study abroad: A case study of Japanese short-term exchange students. *Journal of International Student Advisors and Educator*. (『留学生交流・指導研究』) 10, 69-84.

Takahama, A., & Tanaka, T. (2011). The use of social skills by Japanese students while studying in the United States. *Journal of International Students Education*. (『留学生教育』) 16, 125-133.

Watzlawick, P., Beavin, J. H., & Jackson, D. D. (1967). Some tentative axioms of communication. In *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*, (pp. 48-71). New York, NY: W. W. Norton & Company.

謝辞

本研究は、科学研究費補助金・萌芽研究 No. 19653099 (代表・高濱 愛) の助成を受けた。

付記

本研究は、2011 年 9 月 10 日に多文化関係学会第 10 回年次大会において発表された。